『朱子語類』巻第一百二十五「老氏［莊子附］」訳注（二）

山田　俊

本稿は、『朱子語類』巻第一百二十五「老氏［莊子附］」訳注の第二稿である。本訳注の執筆方針、常用する参考文献等に就いては、「『朱子語類』巻第一百二十五「老氏［莊子附］」訳注（一）」（『熊本県立大学文学部紀要』第16巻（通巻69号）所収、2010年。以下「第一稿」と略す）を参照されたい。本稿から新たに使用する文献とその略称は以下の通りである。

・興膳宏・木津祐子・齋藤希史訳注『「朱子語類」訳注巻十～十一』（汲古書院、2009年）、「『朱子語類訳注巻十～十一』」と略す。

・野口善敬・廣田宗玄・本多道隆・森宏之「『朱子語類』巻一二六「釈氏訳注（一）」（『東洋古典學研究』第26集、2008年）、「『野口訳注（一）』」と略す、同「（三）」（『同』第28集。2009年）、「『野口訳注（三）』」と略す。

老莊

【18】

老子猶要做事在(1)。莊子(校1)都不要做了、又却説道他會做、只是不肯做。［廣(校2)］

（校1）「莊子」、楠本は「到莊子」に作る。　（校2）「廣」、楠本本は無し。

※『三浦語類』（p.421）。

〔訳〕

老子はまだ行動しようと思っている。莊子は全く行動しようとせず、行動出来るのだが、しようとしないだけだ、などと言っている。（輔広）。

（1）「在」：「在」は文末に置かれて事態の継続を示す。『語類』に多く見られる。『三浦語類』（p.421）を参照。『田中』は「しばしば『還』『尚』『猶』を伴い、”まだ…している“の意」とする（p.90）。

（2）「廣」：輔廣、第一稿【1】條注（5）を参照。

【19】

「莊周是箇（校1）大秀才、他都理會得、只是不把做事。觀其第四篇人間世及漁父篇以後、多是説孔子與諸人語、只是不肯學孔子、所謂『知者過之』（1）者也。如説『易以道陰陽、春秋以道名分』（2）等語、後來人如何下得。它直是似快刀利斧劈截將去、字字有著（校2）落（3）」。公晦曰、「莊子較之老子、較平帖（4）些」。曰、「老子極勞攘（校3）（5）、莊子得些、只也乖（6）。莊子跌蕩（7）、老子收斂（校4）、齊脚（校5）斂（校4）手（8）。莊子却將許多道理掀翻（校6）（9）説、不拘繩墨［方子（10）録云、「莊子是一箇大秀才、他事事識得。如天下篇後面乃是説孔子、似用快刀利斧斫將去、更（校7）無些礙、且無一句不著（校8）落。如説『易以道陰陽』等語、大段説得好、然却不肯如此做去。老子猶（校9）是欲斂（校10）手齊脚（校5）去做、他却將他窠窟（校11）一齊踢翻（校6）了」。（校12）］。莊子去孟子不遠、其説不及孟子者、亦是不相（校13）聞。今亳（校14）州明道宮乃老子所生之地（12）。莊子生於蒙、在淮西間（13）。孟子只往來齊、宋、鄒、魯以至於梁而止、不至於南。然當時南方多是異端、如孟子所謂『陳良、楚産也、悦周公、仲尼之道、北學於中國』、又如説『南蠻鴂（校15）舌之人、非先王之道』（14）、是當時南方多異端」。或問、「許行恁地低、也有人從之（15）」。曰、「非獨是許行、如公孫龍『堅白同異』之説、是甚模樣（16）。也使得人終日只弄這箇（校1）」。漢卿問、「孔子順許多話却好（17）」。曰、「出於孔叢子、不知是否。只孔叢子説話、多類東漢人文、其氣軟（校16）弱、又全不似（校17）西漢人文。兼西漢初若有此等話、何故不略（18）見於賈誼、董仲舒所述。恰限到東漢方突出來。皆不可曉（校18）」。［賀孫（19）］。

［前廣録一條、疑聞同（校19）（20）］。

（校1）「箇」、楠本本は「个」に作る。（校2）「著」、楠本本、和刻本、正中書局本は「着」に作る。（校3）「攘」、楠本本は「壤」に作る。（校4）「斂」、楠本、和刻本、正中書局本は「歛」に作る。（校5）「脚」、朝鮮整版は「腳」に作る。（校6）「翻」、和刻本、正中書局は「飜」に作る。（校7）「更」、朝鮮整版は「㝵」に作る。（校8）「著」、和刻本、正中書局本は「着」に作る。（校9）「猶」、和刻本は「犹」に作る。（校10）「斂」、和刻本、正中書局本は「歛」に作る。（校11）「窟」、正中書局本は「屈」につくる。（校12）「方子録～」以下の細注、楠本本無し。（校13）「相」、楠本本無し。（校14）「毫」、楠本本、和刻本は「毫」に作る。（校15）「鳩」、楠本本は「鳩」に作る。（校16）「軟」、楠本本は「較」に作る。（校17）「似」、楠本本は「以」に作る。（校18）楠本本は以下に「按李方子録一段上不拘繩墨而語不同」の細注有り。（校19）「賀孫～」以下、楠本無し。

〔訳〕

「荘子はとても優れた人物で、彼は全部わかっていたのだが、ただ、それを実践しようとしなかったのである。その第四篇『人間世篇』と『漁父篇』以後を見るならば、その多くは孔子と人々の言葉となっているのに、（荘子は）孔子に学ぼうとせず、所謂『智慧ある者は（道を省みず）通り過ぎる』を地で行ったのである。荘子は『易は陰陽を説き、春秋は大義名分を説く』等と説いているが、後で彼がそれをどの様に実行したというのか。彼の説はまったくもってよく切れる刀や斧でばっさりと断ち切る様なもので、一字一字は落ち着いているのだ」。朱子「荘子は老子と比べるならば、いくらか穏当である」。朱子「老子の説は手管に満ちているが、荘子はそれほどではなく、通常の説き方から逸れているに過ぎない。荘子はとらわれる所がないが、老子は内側に収斂し、足を揃え手を懐に仕舞い大人しくしている。荘子はむしろ多くの道理を引っ繰り返して説き、常識にとらわれるところが無い（李方子の記録「荘子はとても優れた人物で、彼は一つ一つの事柄についてはよく分かっていた。『天下篇』以後の箇所は孔子に言及し、よく切れる刀や斧で断ち切ろうとする

かの様で、些かの滞りもなく、且つ一句といえども落ち着かないものはないのだ。『易は陰陽を説く』等と言っているのは、非常によく説いてはいるが、しかし、説いている様にしようとはしなかったのだ。老子はまだ手を懐に収め脚を揃え大人しくしているが、荘子はむしろ今までの在り方を蹴散らそうとしている」）。荘子は孟子と時期がそれ程隔たってはいないが、その説が孟子に言及していないのは、耳にしなかったためであろう。現在の亳州の明道宮は老子生誕の地だ。荘子は（宋の）蒙沢で生まれ、（楚の）淮水の西までの地区に居た。孟子は僅かに斉、宋、鄒、魯と梁を往来したのみで、南方には行っていない。当時、南方には多くの異端がいた。孟子が『陳良は楚の出自で、周公・仲尼の道を好み、北中国で学んだ』と言っているのがそれであり、又『南蠻鴂舌の人は、先王の道ではない』と言っているのは、当時南方に異端が多かったことを意味しているのだ」。或る者の質問「許行はあの様に程度が低かったのに、それでも彼に従う人がいたのですか」。朱子「許行だけではなく、公孫龍の『堅白同異』の説だってどうであろうか。やはり人々に終日その説を弄ばさせていたではないか」。輔広の質問「（『資治通鑑』に見られる）孔子順の多くの話は好いですね」。朱子「あれらは『孔叢子』から出たもので、正確なものかどうか分からない。但し、『孔叢子』の話は、多くが東漢の人の文に似ており、その気風は軟弱であり、西漢の人の文には全く似ていない。更に、もし、西漢初にこの様な話があったならば、どうして賈誼や董仲舒の記述にそれらが少しも見られないのか。丁度東漢になってから突然現われてきたというのか、理解に苦しむ」。（葉賀孫。先の輔広が記録した一条は、恐らくは同じ内容を聞いたものであろう。）

〔注〕

（1）「知者過之」：「子曰、道之不行也、我知之矣。知者過之、愚者不及也」（『十三經注疏分段標點』本『禮記』「中庸」p.2192。新文豊出版公司、中華民国90年）。

（2）「易以道陰陽～」：「詩以道志、書以道事、禮以道行、樂以道和、易以道陰陽、春秋以道名分」（『荘子』「天下」p.288）。本巻【54】條にも見られる。

（3）「著落」：「着落」とも書き、「落ち着く」の意。『語類』には「讀書須將心貼在書册上、逐句逐字、各有着落、方始好商量」（『語類』巻十一 p.177）と見られる。『三浦語類』（p.145）を参照。

（4）「平帖」：「穏当である、穏やかである」の意。『語類』には「道夫曰、如他説孟子道性善、似乎好奇、全不平帖」（『語類』巻一百四十 p.3339）と見られる。『宋元語言詞典』は「平靜、平復」（p.194）とする。

（5）「勞攘」：「手練手管に満ちている」の意。『語類』には多く見られるが、「老子」に関連しては「老子極勞攘、莊子較平易」（『語類』巻六十三 p.1540）と見られる。「勞攘」の語は、『宋元語言詞典』が「活動頻繁、奔波勞碌、紛紛亂亂」（p.389）とし、『近代漢語大詞典』が「忙碌、勞苦」（p.1110）とする様に、本来は「ばたばたと忙しい、ごたごたとしている」の意であろうが、林希逸『老子鬳齋口義』が「故晦翁以爲老子勞攘、西山謂其間有陰謀之言」（『老子鬳齋口義』「發題」p.2。華東師範大學出版社、2010年）と、朱熹の「勞攘」の語と眞德秀の「陰謀」の語を併用していることからも、『老子』を形容する当時の「勞攘」の語の用法が窺える。

（6）「乖」：「通常のやり方から背いている」の意味で、【26】條に見られる「轉調」と同様の意味として解した。

（7）「跌蕩」：「捉われない、拘らない」の意。『語類』には『莊子』に関連して「又曰、曾點意思、與莊周相似、只不至如此跌蕩。莊子見處亦高、只不合將來玩弄了」（『語類』巻四十 p.1027）等と見られる。『近代漢語大詞典』は「洒脱、無拘無束」（p.455）とする。

（8）「斂手」：「何もしようとしない様」の意。『語類』には「所謂君子者、豈是斂手束脚底村人耶」（『語類』巻三十五 p.924）と見られる。『近代漢語大詞典』は「①恭順、②不敢妄爲」（p.1148）とし、ここは②。

（9）「掀翻」：「引っ繰り返す、かき混ぜる」の意。『語類』には「禪學一喝一棒、都掀翻了、也是快活。却看二程説話、可知道不索性」（『語類』巻一百二十六 p.3030）等と見られる。『近代漢語大詞典』は「打翻、攪翻」（p.2004）とする。

（10）「方子」：李方子、第一稿【13】條注（3）を参照。

（11）「窠窟」：「今までのやり方、在り方」の意。『語類』には、「但老子則猶自守箇規模子去做、到得莊子出來、將他那窠窟盡底掀番了、故他自以爲一家」（『語類』巻六十三 p.1540）等と見られる。『近代漢語大詞典』は「比喩現成格式、陳規舊套」（p.1037）とする。

（12）「亳州明道宮」：朱子のこの発言と全く同文が、宋・陳師道「送何子温移亳州三首」第一首の宋・任淵注に「亳州明道宮乃老子始生之地」（『后山詩注』巻八）と見られる。尚、謝守灝『太上老君年譜要略』に、殷の武丁庚辰歳二月十五日に老子が「亳之苦縣瀨鄉曲仁里」に降誕して以後の、歴朝に於ける事例が諸文献に基づいて列挙されている（3b/10 ～）。

（13）「莊子生於蒙」：「莊子者、蒙人也、名周。周嘗爲蒙漆園吏、與梁惠王、齊宣王同時。…楚威王聞莊周賢、使使厚幣迎之、許以爲相」（『史記』巻六十三「老子韓非列傳第三」p.2143）。

（14）「南蠻鴂舌之人」：「今也南蠻鴂舌之人、非先王之道。子倍子之師而學之、亦異於曾子矣。吾聞出於幽谷、遷于喬木者。未聞下喬木而入於幽谷者。魯頌曰、戎狄是膺、荆舒是懲、周公方且膺之、子是之學、亦爲不善變矣」（『孟子』「滕文公上」p.396）。

（15）「許行」：「有爲神農之言者許行、自楚之滕、踵門而告文公曰、遠方之人、聞君行仁政、願受一廛而爲氓。文公與之處、其徒數十人、皆衣褐、捆屨織席以爲食。陳良之徒陳相、與其弟辛、負耒耜而自宋之滕、曰、聞君行聖人之政、是亦聖人也。願爲聖人氓。陳相見許行而大悅、盡棄其學而學焉」（『孟子』「滕文公上」p.365）。

（16）「甚模様」：「どの様なものか」の意。『語類』には「惟無私、然後仁。惟仁、然後與天地萬物爲一體。要在二者之間識得畢竟仁是甚模様」（『語類』巻六 p.117）等多数見られる。『三浦語類』（p.406）を参照。

（17）「孔子順」：現行『孔叢子』「陳士義第十四～執節第十六」に登場する。

（18）「不略～」：「まったく～でない」の意。『語類』には「使其有之、人數極多、何不略見於他書」（『語類』巻五十八 p.1371）等と見られる。『唐宋筆記語辭匯釋』は「略、又猶言『全』『都』、範圍副詞、與表偏量『稍微』、『一點兒』的常見用法相反、多與否定詞連用」（p.120）とする。

（19）「賀孫」：葉賀孫、字は味道、後に味道を名とし、知道を字としたとされる。温州の人。『學案』巻六十五（p.2105）、『師事』（p.194）

（20）「前廣録一條」：第一稿【17】條を指す。

【20】

問、「老子與莊子似是兩般説話」。曰、「莊子於篇末自説破矣（1）」。問、「先儒論老子、多爲之出脱（2）、云老子乃矯時之説（3）。以某觀之、不是矯時、只是不見實（校1）理、故不知禮樂（校2）刑政之所出、而欲去之」。曰、「渠若識得『寂然不動、感而遂通天下之故（4）』、自不應如此。它本不知下一節、欲占一簡徑（5）言之。然上節無實（校3）見、故亦不脱洒（校4）（6）。今讀老子者亦多錯。如道德經云『名非常名（校5）（7）』、則下文有名、無（校6）名、皆是一義、今讀者皆將『有、無（校6）』作句。又如『常無（校6）欲、以觀其妙。常有欲、以觀其竅（校7）』、只是説『無欲、有欲』、今讀者（校8）乃以『無（校6）、有』爲句（8）、皆非老子之意」。［可學（9）］

（校1）「實」、楠本本は「実」に作る。（校2）「禮樂」、楠本本は「礼楽」に作る。（校3）「無實」、楠本本は「无実」に作る。（校4）「洒」、朝鮮整版は「灑」に作る。楠本本は「酒」に作る。（校5）「名非常名」、楠本本は「名可名、非常名」に作る。（校6）「無」、楠本本は「无」に作る。（校7）「竅」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本は「徼」に作る。（校8）「無欲、有欲、今讀者」、楠本本は「無欲［今有］欲讀者」と、「今有」を細注に作る。

【訳】

質問「老子と莊子とではその説が全く異なっているようです」。朱子「莊子はその篇末に於いて自らはっきりと言っている」。質問「先儒が老子を論じるのに、（両者が異なっているために）多くは『老子の説は矯時の説である』とでっち上げ（て両者を同じものとしようとし）たのです。私が思うに矯時ではなく、（老子は）単に実理を見ていないがために、礼・楽・刑・政の根源を知らず、それらを廃棄しようとしていたのだと思います」。朱子「彼がもし『易』の『寂然と静まりかえって動かず、働き掛けに応じて天下のあらゆる事に通じる』の思想を知っていたならば、自ずとこの様にはならなかったであろう。彼は後半部分（「感而遂通天下之故」）を理解していなかったために、簡明直截にこれを言おうとしたのだ。だが、前半部分（「寂然不動」）に於いてもよく理解していなかったので、（自身の見解に）捉われてしまったのだ。現在、老子を読む者の多くが間違っている。『道徳經』が『名非常名』と言っているのは、下文に見られる『有名』『無名』と同一意義であるのに、今の読者は皆『有・無』で句点としている。又、『常に無欲であって、微妙な世界が見える。常に有欲であって、現象的世界を見る』の文も、ただ、『無欲、有欲』を述べているのに、今の読者は『無、有』で句点としてしまっている。全ての老子の意味する所とは異なっているのだ」。（鄭可学）

〔注〕

（1）「莊子於篇末自説破矣」：『莊子』「天下篇」後半で「老聃曰、知其雄、守其雌、爲天下谿。知其白、守其辱、爲天下谷。人皆取先、己獨取後…」（『莊子』「天下篇」p.294）と社会から身を退けるものとして「老子」の立場を説明しているのに対し、「莊子」自身は「芴漠無形、變化無常。死與生與、天地並與、神明往與。芒乎何之、忽乎何適。萬物畢羅、莫足以歸。古之道術有在於是者。莊周聞其風而悅之、以謬悠之説、荒唐之言、無端崖之辭、時恣縱而不儻、不以觭見之也」（「同」p.295）と、通常とは異なる言語を用いるものとして、説明している部分を指すか。

（2）「出脱」：「ごまかして何とかする、でっち上げる」の意に解釈した。『語類』には「此皆是史家要出脱符堅殺兄之罪、

故裝點許多、此史所以難看也」（『語類』巻一百三十六 p.3236）等と見られる。『近代漢語大詞典』は「造成、成全」（p.277）とする。

（3）「矯時之説」：『老子』を「矯時」の思想とする早い例としては、唐・玄宗の天寶元年「分道德爲上下經詔」に「我烈祖元元皇帝、乃發明妙本、汲引生靈。遂著元經五千言、用救時弊」（『全唐文』巻三十一）と見られ、又、強思齋は「佳兵章第三十一」の題注に「夫佳兵章所以次前者、前章雖明息兵用道、而於用道之義未弘。故次。此章明用道匡時、須資權實兩智」（『道德眞經玄德纂疏』8/12b/3）と述べている。宋代では、司馬光が『老子』第三章に注して「賢之不可不尚、人皆知之。至末流之弊、則爭名而長亂。故老子矯之、欲人尚其實、不尚其名也」（『道德眞經論』1/2b/7）と述べ、葉夢得『老子解』が「老氏之書、其與孔子異者、皆矯世之辭、而所同者、皆合於易」（彭耜『道德眞經集註雜説』下 /8b/8）と述べている。尚、『莊子』を「矯時」とするものとしては、王安石は「故同是非、齊彼我、一利害、則以足乎心爲得、此其所以矯天下之弊者也」（四部叢刊初編『臨川先生文集』巻六十八「莊周上」）と述べる。これに関する、二程の発言に就いては、【21】条注（1）を参照。

（4）「寂然不動、感而遂通天下之故」：「易無思也、無爲也。寂然不動、感而遂通天下之故。非天下之至神、其孰能與於此」（『易』「繫辞上」、下冊 p.550）。

（5）「簡徑」：「完結、直裁」の意。『語類』には「此古注説得甚好、又簡徑」（『語類』巻三十九 p.1011）等と見られる。

（6）「脱洒」：「脱灑」とも書き、「規範に捉われず、拘泥しない」という肯定的意味と、「無規範に」という否定的意味とが有る。『語類』には前者としては「某向他道、和尚得恁不脱灑。只要戀着這木毬要熱做甚」（『語類』巻三、p.54）と有り、後者としては「因論佛曰、老子先唱説、後來佛氏又做得脱洒廣闊、然考其語、多本莊列」（『語類』巻一百二十六 p.3011）と有る。ここは前者。『朱子語類訳注巻一～三』【80】條注（11）（p.378）、『野口訳注（一）』【9】條（p.121）を参照。『近代漢語大詞典』は「曠達、洒脱」（p.1896）とする。

（7）「名非常名」：「道可道、非常道。名可名、非常名。無名天地之始、有名萬物之母。故常無欲、以觀其妙。常有欲、以觀其徼。此兩者同出而異名、同謂之玄。玄之又玄、衆妙之門」（『老子』第一章。上冊 p.1）。

（8）「無有爲句」：三浦秀一『中国心学の稜線―元朝の知識人と儒道仏三教―』（研文出版、2003 年）は、彭耜『道德眞經集注』所収注釈に依り、「常無、欲以觀其妙、常有、欲以觀其徼」と加点する者に徽宗、司馬光、蘇轍、王安石、葉夢得などがいるとする（p.230）。補足すれば、徽宗注の疏である宋・江澂『道德眞經疏義』（1/7a/5 ～）、宋・趙秉文『道德眞經集解』（1/1b/9 ～）、林希逸『老子鬳齋口義』（p.1）も「常無」「常欲」で句点とする。

（9）「可學」：鄭可學、第一稿【10】條注（1）を参照。

【21】

莊子、老子不是矯時。夷、惠矯時(1)、亦未是。［可學］

※　楠本本はこの条無し。

〔訳〕

莊子と老子は何れも矯時の説ではないのだ。伯夷、柳下恵が矯時の説であると言うのも、やはり正しくない。（鄭可学）

〔注〕

（1）「矯時」：二程に「莊子、叛聖人者也、而世之人皆曰矯時之弊。矯時之弊、固若是乎。伯夷、柳下惠、矯時之弊者也、其有異於聖人乎、抑無異乎。莊周、老聃、其與伯夷柳下惠類乎、不類乎。子夏曰、雖小道、必有可觀者焉、致遠恐泥。子曰、攻乎異端、斯害也已。此言異端有可取、而非道之正也」（『二程集』巻二十五 p.320）と見られる。

莊列

【22】

孟子、莊子文章皆好。列子在前(校1)、便(校2)有迂僻(1)處(校3)。左氏亦然(2)、皆好高(3)而少事實(校4)。[人傑(4)]

(校1)「在前」、楠本本は無し。　(校2)「便」、朝鮮整版は「便」に作る。　(校3)「處」、楠本本は「処」に作る。　(校4)「實」、楠本本は「実」に作る。

〔訳〕

孟子と莊子の文章はどちらも好い。列子は孟子・莊子よりも早いが、捉われていて、出鱈目な点がある。『春秋左氏傳』も同様で、高尚な内容を好むが、事実に基づいた記載が少ない。(万人傑)

〔注〕

(1)「迂僻」：「とらわれていて、出鱈目」の意。『語類』には「正義引劉氏、皇氏、熊氏説、皆臆度、迂僻之甚」(『語類』巻五十五 p.1311)と見られる。『近代漢語大詞典』は「迂腐怪誕」(p.2277)とする。

(2)「左氏亦然」：『語類』には「國秀問三傳優劣。曰、左氏曾見國史、考事頗精、只是不知大義、專去小處理會、往往不曾講學。公穀考事甚疏、然義理却精。二人乃是經生、傳得許多説話、往往都不曾見國史」(『語類』巻八十三 p.2151)と、『左氏』は細かい点にのみ注意する余り「大義」を知らないと有る。又、宋・趙鵬飛『春秋經筌』が「是知左氏之説迂矣」(巻十三)と述べ、元・程端學『春秋三傳辨疑』が「齊氏曰、左氏理甚迂」(巻五)と述べる等、「左氏迂」という記述が見られる。

(3)「好高」：「高尚さを好む」という批判的意味。『語類』には、「如今學者有二病。好高、欲速」(『語類』巻一百二十六 p.3018)と見られる。尚、『野口訳注(三)』p.133 注(8)に「好高」に関する見解がまとめられている。参照されたい。

(4)「人傑」：萬人傑、字は正淳、大冶の人。『學案』巻六十九(p.2322)、『師事』(p.62)。

※楠本本は本條の後に、改行の上、次の条を記載する。「莊周列禦冠亦似曾點底意思。他也不是專李老子、吾儒書他都看來、不知如何被他晫見這个物事、便放浪去了。今禪李也是恁地。　淳」。これと同文は底本『語類』巻一百十七に「莊周列禦寇亦似曾點底意思。他也不是專學老子、吾儒書他都看來、不知如何被他綽見這箇物事、便放浪去了。今禪學也是恁地」（『語類』巻一百十七 p.2827）と見られる。

【23】

因言、列子語、佛氏多用之(1)。莊子全寫列子、又變(校1)得峻奇。列子語温純(2)、柳子厚嘗稱(校2)之(3)。佛家於心地上煞(4)下工夫。［賀孫］

（校1）「變」、楠本本、和刻本は「変」に作る。　（校2）「稱」、楠本本は「称」に作る。

〔訳〕

列子の語に話が及んだ。釈氏は多くこれを用いている。莊子は列子を全く書き写した様なものだが、すっかり尋常ではないものに変えてしまったのだ。列子の語は穏やかで素直であり、柳子厚はかつてそれを讃えた。仏教は（列子を用いつつも）その心の点で大いに工夫をこらしたのだ。（葉賀孫）

〔注〕

（1）「列子語、佛氏多用之」：『列子』と仏教の関係に就いて『語類』には「初來只有四十二章經、至晋宋間乃談義、皆是剽竊老莊、取列子爲多」（『語類』巻一百二十六 p.3038）等と巻一百二十六に多く見られる。

（2）「温純」：「穏やかで素直」の意。『語類』には「游氏所説則有温純不決之意。李端伯所記則平正」（『語類』巻九十七 p.2480）と見られる。

（3）「柳子厚」：「雖不概於孔子道、然其虚泊寥闊、居亂世、遠於利、禍不得逮乎身、而其心不窮。易之遁世無悶者、其近是歟。余故取焉。其文辭類莊子、而尤質厚、少爲作、好文者可廢耶」（『柳河東集』巻四「辯列子」。上海人民出版社、1974年。P.67）。

（4）「煞」：「非常に、とても」の意。『語類』には多数見られる。『宋元語言詞典』は「極甚之詞」（p.942）、『古賀初稿』は「はなはだ、なかなかに」（p.143）、『近代漢語大詞典』は「很、十分」（p.1621）とする。

【24】

列、莊本楊朱之學（校1）、故其書多引其語。莊子説、「子之於親也、命也、不可解於心」。至臣之於君、則曰、「義也、無所逃於天地之間（1）」。是他看得那君臣之義、却似是逃不得、不奈何、須著（校2）（2）臣服。他更（校3）無一箇（校4）自然相胥爲一體處、可怪（校5）。故孟子以爲無君（3）、此類是也。［大雅（4）］

（校1）「學」、楠本本は「斈」に作る。　（校2）「著」、楠本本、和刻本、正中書局本は「着」に作る。　（校3）「更」、朝鮮整版は「㝵」に作る　（校4）「箇」、楠本本は「个」に作る。　（校5）「怪」、楠本本、正中書局本、和刻本は「恠」に作る。

〔訳〕

列子も荘子も楊朱の学に基づいており、だから、その書は楊朱の語を多く引用しているのだ。荘子は「子が親を愛するのは運命であって、子供の心から取り去るわけにはいかない」と言っている。主君に対する臣下に就いては、「義である、天地の間でどこに行っても、それから逃げることは出来ない」と言っている。これは、荘子も君臣の義を知り、そこから逃げ出すことは出来ず、どうしようもなく、臣下として服さなければならないと考えていたのだ。まして、荘子には一つの自然として互いに一体となるなどという考えは無かったのだ。奇妙なことだ。だから、孟子が「無君」の説と理解した

のは、この類のものなのである。（余大雅）

〔注〕

（1）「莊子説」：「仲尼曰、天下有大戒二。其一命也、其一義也。子之愛親、命也、不可解於心。臣之事君、義也。無適而非君也。無所逃於天地之間。是之謂大戒」（『莊子』「人間世」p.38）。

（2）「須著」：「～すべきである、～せねばならない」の意。『語類』には「凡讀書、初一項須著十分工夫了、第二項只費得九分工夫、第三項便只費六七分工夫」（『語類』巻十四 p.254）等多数見られる。『三浦語類』（p.155）を参照。

（3）「故孟子以爲無君」：『孟子』「滕文公下」。第一稿【7】條注（1）参照。

（4）「大雅」（1138～1189）：余大雅（1138～1189）、字は正叔、信州饒県の人、『學案』巻六十九（p.2300）は順昌の人とする。『師事』（p.55）

老莊列子

【25】

莊子是箇（校1）轉調（1）底。老子、列子又細似莊子（2）。

（校1）「箇」、楠本本は「个」に作る。

〔訳〕

莊子は常識を覆すものだ。老子と列子は莊子より周到である。

〔注〕

（1）「轉調」：「調子を変える」の意から、ここでは「通常とは逆の姿勢・立場をとる」の意に解した。『語類』には本

巻【36】條に、「莊子比老子便不同。莊子又轉調了精神、發出來粗」（『語類』巻一百二十五 p.2996）と見られる。

（2）「列子又細似莊子」：「似」は比較を現わす介詞。「似」に就いては、『三浦語類』は「是他低高似你の『似』は比較を表わす」（p.460）とし、『唐宋詞常用辞典』（内蒙古人民出版社、1988年）は「過的意思、介詞」とし、趙長卿『清平樂』の「窄似年時一半」を「衣服比去年瘦一了半」とする（p.124）。

【26】

「雷擊所在、只一氣滚(校1)來(1)、間有見而不爲害、只緣氣未掤裂、有所擊者皆是已發」。蔡季通(2)云、「人於雷所擊處、收得雷斧之屬(校2)(3)、是一氣擊後方始結成、不是將這箇(校3)來打物。見人拾得石斧如今斧之状、似(校4)細黄石(4)」。因説道士行五(校5)雷法(5)。先生曰(校6)、「今極卑陋是道士、許多説話全亂(校7)道」。蔡(校8)云、「禪家又勝似他(6)」。曰(校9)、「禪家已是九分亂道(7)了。他又把佛家言語參雜在裏面。如佛經本自遠方外國來、故語音差異、有許多差異字、人都理會不得。他便(校10)撰許多符呪、千般萬樣、教人理會不得、極是陋」。蔡云、「道士有箇(校3)莊、老在上、却不去理會(8)」。曰(校11)、「如今秀才讀多少書、理會自家道理不出。他又那得心情去理會莊、老」。蔡云、「無人理會得老子通透(9)、大段鼓動(10)得人、恐非佛教之比」。曰(校11)、「公道如何」。蔡云、「緣他帶治國、平天下道理在」。曰(校11)、「做得出、也只是(11)箇(校3)曹參」。蔡云、「曹參未(校12)能盡其術」。曰(校11)、「也只是恁地、只是藏縮無形影」。因問蔡曰、「公看『道可道、非常道。名可名、非常名。無名天地之始、有名萬物之母』、是如何説」。蔡云、「只是無名是天地之始、有名便(校10)是有形氣了。向見先生説庚桑子一篇都是禪(12)、今看來果是」。曰、「若其它篇、亦自有禪話、但此篇首尾都是這話」。又問蔡曰、「莊子『虚無因應』(13)、如何點」。曰、「只是恁地點」。「多有人將『虚無』自做一句、非是(14)。他後面又自解如何是無、如何是因」。又云、「莊子文章只信口(15)流出、煞高(16)」。蔡云、「列子亦好」。曰(校9)、「列子固好、但説得困弱、不如莊子」。問、「老子如何」。曰(校11)、「老子又較深厚」。蔡云、「看莊周傳説、似乎莊子(校13)師於列子。云先有作者如(校14)此(17)、恐是指列

子」。曰（校11）、「這自説道理（校15）、未必是師列子」。蔡問、「『皆原於道德之意』、是誰道德」。曰（校11）、「這道德只自是他道德」。蔡云、「人多作吾聖人道德。太史公智識（校16）卑下（18）、便（校10）把這處作非細看、便（校10）把作大學、中庸看了」。曰（校10）、「大學、中庸且過（校17）一邊（19）、公恁地説了、主張史記人道如何（20）。大凡看文字只看自家心下、先自偏曲了、看人説甚麽事、都只入這意來。如大路看不見、只行下偏蹊曲徑去（21）。如分明大字不看、却只看從罅縫（22）四旁（校18）處去。如字寫在上面不看、却就字背（校19）後面看。如人眼自花了、看見眼前物事都差了。便（校10）説道只恁地」。蔡云、「不平心看文字、將使天地都易位了」。曰（校11）、「道理只是這一箇（校3）道理、但看之者情僞變態、言語文章自有千般萬樣。合説東、却説西、合説這裏、自説那裏。都是將自家偏曲底心求古人意」。又云、「如太史公説話、也怕古人有這般人、只自家心下。不當如此。將臨川、何言、江默之事觀之、説道公羊、穀梁是姓姜人一手做（23）、也有這般事。尚書序不似孔安國作、其文軟弱、不似西漢人文（24）、西漢文粗（校20）豪（25）。也不似東漢人文、東漢人文有骨肋（26）。也不似東晋人文、東晋如孔坦疏（校21）（27）也自得。他文是太（校22）段弱、讀來却宛順（28）、是做孔叢子底人一手做。看孔叢子撰許多説話、極是陋（29）。只看他撰造説陳涉、那得許多説話正史都無之。他却説道自好、陳涉不能從之（30）。看他文章卑弱、説到後面、都無合殺（31）」。蔡云、「恐是孔家子孫」。曰、「也不見得」。蔡説、「春秋呂氏解煞好（32）」。曰（校11）、「那箇（校3）説不好。如一句經在這裏、説做褒也得、也有許多説話。做貶也得、也有許多説話、都自説得似（33）」。又云、「如史記秦紀分明是國史、中間儘謹嚴。若如今人把來生意説（34）、也都由他説。春秋只是舊史録在這裏」。蔡云、「如先生做通鑑綱目、是有意、是無意。須是有去取。如春秋、聖人豈無意」。曰、「聖人雖有意、今亦不可知、却妄爲之説、不得（35）」。蔡云、「左氏怕是左史倚相之後（36）、蓋左傳中楚事甚詳」。曰（校11）、「以三傳較之、在左氏得七八分」。蔡云、「道理則穀梁及（校23）七八分。或云、三傳中間有許多騃處、都是其學者後來添入」。［賀孫］。

（校1）「滚」、楠本本、朝鮮整版、正中書局本は「袞」に作る。（校2）「屬」、楠本本、正中書局本、和刻本は「属」に作る。（校3）「箇」、楠本本は「个」に作る。（校4）「似」、楠本本は「以」に作る。（校5）「五」、楠本は無し。（校6）「曰」、

楠本本は「云」に作る。（校7）「亂」、和刻本は「乱」に作る。（校8）「蔡」、楠本本は「蔡文」に作る。（校9）「曰」、楠本本は「先生云」に作る。（校10）「便」、朝鮮整版は「便」に作る。（校11）「曰」、楠本本は「先生曰」に作る。（校12）「未」、楠本本は「却」に作る。（校13）「莊子」、楠本本は「莊周」に作る。（校14）「如」、楠本本は「知」に作る。（校15）「道理」、楠本本は「這道理」に作る。（校16）「識」、正中書局本は「誡」に作る。（校17）「過」、楠本本は「遇」に作る。（校18）「罅縫四旁」、朝鮮整版、楠本本は「罅縫偏旁」に作り、正中書局本は「鏬縫偏旁」に作り、和刻本は「鏬縫四旁」に作る。（校19）「背」、楠本本は「背下」に作る。（校20）「粗」、楠本本、正中書局本、和刻本は「麄」に作り、朝鮮整版は「麤」に作る。（校21）「疏」、楠本本、正中書局本、和刻本は「疏」に作る。（校22）「太」、楠本本、朝鮮整版は「大」に作る。（校23）「及」、楠本本は「乃」に作る。

〔訳〕

「雷が落ちるのは、一気が転がり出てくるのであり、時として、雷が見えても害をなさない場合が有るのは、気がまだ破裂していないからであり、雷が害をなしたのは気が発しているからなのである」。蔡季通「人が、雷が落ちた所で、雷斧の類を手に入れることが有りますが、これは、気が落ちた後に初めてそれが出来るのであって、最初から雷斧で物を攻撃したという訳ではないのです。人が拾った石斧を見ると、今の斧の形に似ていて、細かい黄石の様です」。話が道士が行う五雷法に及んだ。朱子「今日、最もひどいのが道士で、彼らの話の多くは全くのでたらめだ」。蔡季通「禅宗は道教より優れています」。朱子「禅宗の場合はほとんどがでたらめだ。道教も仏教の言葉を道教の中に取り込み混ぜている。仏典はもともと遠くの外国から来たもので、その語音は（中国語とは）異なり、文字も多く異なっていて、人々は全く理解することが出来なかった。道教は更に多くの呪符を作り、それは千差万別で、人々は全く理解することが出来ない、極めてひどいものだ」。蔡季通「道士の中には、荘子・老子を尊重しながら、それを相手にしようとしない者達がいます」。朱子「今日の『秀才』はどれ程かの書を読んでいるのに、それでも自分たち儒家の道理すら理解していない。（まして）

道士がどうして莊子・老子を相手にしようとする気になるであろうか」。蔡季通「老子に精通出来る者がいないのにも関わらず、(その教えが)大いに人を突き動かすのは、恐らくは仏教の比ではないでしょう」。朱子「あなたはどう思いますか」。蔡季通「老子の思想に治国平天下の思想が有るためだと思います」。朱子「それを実現し得たのは、ただ曹参だけだ」。蔡季通「曹参はその教えを極め尽くした訳ではありません」。朱子「彼は単にあの様に縮こまって姿を隠していただけだ」。そこで蔡季通に尋ねた「あなたは『道可道、非常道。名可名、非常名。無名天地之始、有名萬物之母』を、どの様な意味だと思いますか」。蔡季通「無名だけが天地の始まりで、有名は既に形気が存在しているということです。先に先生が『庚桑子』の一篇は全く禅だと言ったのを聞きましたが、今思いますに、それはその通りだと思います」。朱子「その他の篇にも又禅風の話が有るのだが、ただ『庚桑子』一篇は徹頭徹尾禅話のみなのだ」。又、蔡季通に質問した「莊子の『虚無因應』の句点に就いてはどう思いますか」。蔡季通「この通りの句点だと思います」。朱子「多くの人が『虚無』で一句としているが、これは正しくない。この文は後段で自ら『無』とは何か、『因』とは何かを解説しているのだ」。又朱子「莊子の文章は、口から出任せに流れ出たもので、高尚過ぎる」。蔡季通「列子もまた好いです」。朱子「列子は無論よいが、その説は内容に乏しく力強さに欠け、莊子には及ばない」。質問「老子はどうですか」。朱子「老子も又深く重厚である」。蔡季通「莊子の伝説を見ると、莊子は列子に師事した様です。『先にこの様な作者がいた』と言っているのは、恐らくは列子を指しているのでしょう」。朱子「莊子は自ら道理を説いたのであって、必ずしも列子に師事したとは限らない」。蔡季通「いずれも道徳の旨意にもとづく」とは誰の道徳なのですか」。朱子「この道徳は老子の道徳であろう」。蔡季通「多くの人が我々儒教の聖人の道徳と見做しています。太史公は知識・見識が低く、この個所で綿密に読むことをしなかったため、それを『大學』『中庸』と見做してしまったのでしょう」。朱子「『大学』『中庸』と看做したという見方も偏ったものだ。あなたがその様に言うならば、『史記』の立場に基づく人達はどの様に言うだろうか。凡そ文章を読む場合、自身の見解の

みに基づいて読み、その見解が既に歪んでいれば、人がどの様な事を説いているのを見たとしても、全て自分の見解に基づいて理解してしまうのだ。もし大通りが眼に入らなければ、単にわき道や曲がりくねった道を歩むことになる様なものだ。もし表に書かれている文字が見えなければ、却って文字を背後から見ようとする様なものだ。もし目が眩んでいれば、目の前の物を見ても全て見間違えてしまうのだ。(自分の間違った見解に捉われていると)その説はこの様でしかないのだ」。蔡季通「虚心に文字を見ることが出来なければ天地も引っくり返ってしまうことになるのですね。」朱子「道理は一つの道理でしかないが、それを見る者の情(いしき)が誤り、態度が変われば、(それを表現する)言語文章も自ずと様々となってしまうのだ。東と言うべき所を西と言い、ここと言うべき所をあそこと言ってしまう。これらは全て自身の偏り曲がった心に基づいて古人の意図を求めようとしたためだ」。朱子「太史公の例は、恐らく昔にもこの様な人々がいて、自身の思い込みに基づいて判断を下していたということなのだ。この様であってはならない。臨川、何言、江黙の事例で言えば、『公羊傳』と『穀梁傳』が姜という姓の同一人の手になったものであると言うのは、やはり同様に先入観に捉われた見解なのであろう。『尚書』「序」は孔安国の作ではないと思われ、その文は軟弱で、西漢の人の文章らしくない。西漢の文はさっぱりと豪快である。又、東漢の人の文章らしくもなく、東漢の人の文には気骨がある。又、東晋の人の文章らしくもなく、東晋の文章は孔坦の疏を見れば分かる。『尚書』「序」の文はとても軟弱だが、読んでみるとむしろ素直であり、孔叢子の様な人物の手によって撰述されたと考えられる。孔叢子が撰述している多くの話を見ると、極めてひどい。彼が陳渉について言及しているのを見ただけでも、(それが事実であるならば)その多くの話を正史が全く記載していないことはありえないだろう。『孔叢子』は、自らは正しかったのに陳渉が従わなかったと述べているのだ。彼の文章を見ると程度が低く弱々しく、後段に至ると全く収拾がつかなくなっている」。蔡季通「恐らくは孔氏一族の子孫でしょう」。朱子「それもはっきりはしない」。蔡季通「春秋は呂祖謙の解釈がとても好いです」。朱子「あれは好くない。もし一つの経文がここにあったとして、

「褒」る意味を見出すのも可能であり、言うことはたくさん有る。又、「貶」る意味を見出すのも可能であり、やはり言うことはたくさん有る。いずれもそれらしく説いているだけだ」。朱子「『史記』「秦本紀」は明らかに一国の歴史であって、その内容はかなり厳密である。もし今の人が自分の考えを差し挟んで説こうとしたとしても、やはり『史記』に基づいて説くであろう。『春秋』は単に古い歴史がそこに記録されているに過ぎない」。蔡季通「先生が『通鑑綱目』を編纂された時は、考える所が有ったのでしょうか、無かったのでしょうか。当然そこには（お考えに基づいた）取捨がなされているのでしょう。『春秋』等も、聖人に思う所が無かったとは思えません」。朱子「聖人に思う所が有ったとしても、現在では知ることは出来ず、それを無闇に語るのは、よくない」。蔡季通「左氏は恐らく（楚の）左史の倚相の末裔なのでしょう、だから『左傳』の中の楚の事柄は極めて詳細なのでしょう」。朱子「春秋三伝で比べるならば、『左傳』で（当時の事柄の）大半は理解出来る」。蔡季通「道理という点から言えば、『穀梁』は大半が理屈です。或る者が、三伝には多くの愚かな説が有る、と言いますが、これらは皆な学者が後から挿入したものです」。（葉賀孫）

〔注〕

（1）「滾來」：「転がり出てくる」の意。『語類』には「人所禀之氣、雖皆是天地之正氣、但袞來袞去、便有昏明厚薄之異」（『語類』巻四 p.68）、等と「氣」の流動の状態を現わす語として見られる。

（2）「蔡季通」：蔡元定、字は季通（1135 ～ 1198）、建州建陽の人。『學案』巻六十二（p.1979）、『師事』（p.21）。

（3）「雷斧」：唐・李肇『唐國史補』に「或曰、雷州春夏多雷、無日無之。雷公秋冬則伏地中、人取而食之、其状類彘。又云、與黄魚同食者、人皆震死。亦有収得雷斧・雷墨者、以爲禁藥」（『學津討原』本巻下第十八紙）と見られる。『朱子語類訳注巻一～三』【51】條注（3）を参照（p.185）。尚、宋代の法術を記録しているとされる元末明初の『道法會元』には、「天爲雷、地爲雷、霹靂發、雷火飛。三司將吏、今日直符、隨吾驅使、捧領天符、追捉鬼賊、治病消除。敢

有妖魅、雷斧速追。上帝令下、立降方隅。急急如律令」（「玉樞斬勘五雷祈禱大法」63/21a/6）と、「妖魅」を討伐する法具としての「雷斧」が見られる。本條の記述は、後段に見られる雷派の道術を意識した朱熹の発言である。

（4）「黄石」：『朱子語類訳注巻一～三』【51】條注（3）は「落雷の後などに発見される、形状が斧に似た石のことか」とする。同書が引く『夢溪筆談』巻二十「神奇」には「雷楔」の語が見られ、梅原郁訳注『夢溪筆談　2』（平凡社、東洋文庫、1979年）は、「落雷の時に強い電流によって砂がとけ、塊状になってできた雷石（ファルグライト）のことであろう」p.220）とする。山田慶兒『朱子の自然學』（岩波書店、1978年）は「細黄石」とするが（p.396）、ここは「細かい黄石」と解釈した。

（5）「五雷法」：「雷法」は北宋に林靈素の活躍によって民間から隆盛してきた新しい道教。雷の力を呪術力の源泉として、駆邪等を行う。松本浩一『宋代の道教と民間信仰』「第四章　第一節　宋代の雷法」（汲古書院。2006年）を参照。

（6）「勝似」：「似」は比較を現わす介詞。【25】條注（2）を参照。『語類』には「勝似」二字での用例が多く見られる。例えば、「今年頗覺勝似去年、去年勝似前年」（『語類』巻一百四 p.2622）等。

（7）「亂道」：「道を乱す」「乱れた道」として『語類』には多数見られる。仏教に関連しては「某經云、到末劫人皆小、先爲火所燒成劫灰、又爲風所吹、又爲水所淹。水又成沫、地自生五穀、天上人自飛下來喫、復成世界。他不識陰陽、便恁地亂道」（『語類』巻一百二十六 p.3025）と見られる。

（8）「道士有箇莊、老在上、却不去理會」：『語類』には本巻【70】條に「道家有老、莊書、却不知看、盡爲釋氏竊而用之、却去倣傚釋氏經教之屬」（『語類』巻一百二十五 p.3005）と見られる。

（9）「通透」：「熟知する、精通する」の意。『語類』には「大凡看書、要看了又看、逐段逐句逐字理會、仍參諸解傳、説教通透、使道理與自家心相肯、方得」（『語類』巻十 p.162）等と多数見られる。『近代漢語大詞典』は「十分熟悉、精通」（p.1860）とする。

（10）「鼓動」：「人の心をつき動かす」の意。『語類』には仏教に関連しては「如杲佛日之徒、自是氣魄大、所以能鼓動一世、如張子韶汪聖錫輩皆北面之」（『語類』巻一百二十六 p.3029）等と見られる。

（11）「也只是」：『語類』にはこの三文字の用例が数例見られる。暫時、三文字で「ただ」と読んだ。

（12）「庚桑子一篇都是禪」：朱熹が「雑篇庚桑楚第二十三」のどの部分を「禪」と見做したのかは判然としないが、福永光司『中国古典選16　莊子　雑篇・上』（朝日新聞社、1978年。P.8）は、「庚桑子曰、…今吾才小、不足以化子。子、胡不南見老子。南榮趎贏糧、七日七夜、至老子之所。老子曰、子自楚之所來乎。南榮趎曰、唯。老子曰、子何與人偕來之衆也。南榮趎懼然顧其後…」（p.198）と有る箇所が、『景德傳燈録』に「來日師辭黄檗。黄檗指往大愚。師遂參大愚。愚問曰、什麽處來。曰、黄檗來。愚曰、黄檗有何言教。曰、義玄親問佛法的的意。蒙和尚便打。如是三問三遭被打、不知過在什麽處。愚曰、黄檗恁麽老婆、爲汝得徹困、猶覓過在。師於言下大悟云」（T51,299b）と見られる、臨済義玄と高安大愚および黄檗希運の参禅問答を髣髴させると述べている。

（13）「虚無因應」：現行『莊子』には「虚無因應」の句は無い。一般に「虚無因應」は、「太史公曰、老子所貴道、虚無因應、變化於無爲。故著書辭稱微妙難識。莊子散道德、放論要、亦歸之自然。申子卑卑、施之於名實。韓子引繩墨、切事情、明是非、其極慘礉少恩。皆原於道德之意、而老子深遠矣」（『史記』巻六十三「老子韓非列傳第三」p.2156）と『史記』に見られるものである。

（14）「多有人將『虚無』自做一句」：どの様な人々が「虚無」で句点とする解釈を取っていたのかは未詳。尚、本巻【49】條を参照。

（15）「信口」：「口に任せてでたらめに説く」という否定的意味と、「作為やはからないなしに自然に発露する」という肯定的意味が有る。前者に就いては『朱子語類訳注　第一～三巻』巻二【14】條注（9）（p.117）を、後者に就いては宇佐見文理他「『朱子語類』巻一四～一八訳注（一）」（『京都府立大学学術報告　人文』第61号、2009年）p.70

注（1）を参照。ここでは「煞高」と併せて前者の意味とする。

（16）「高」：本巻【22】條注（3）を参照。

（17）「先有作者如此」：『漢書』「藝文志」に「列子八篇［名圄寇、先莊子、莊子稱之］」（『漢書』「藝文志」p.1730）と有るのを指すか。

（18）「太史公智識卑下」：『語類』には「伯恭子約宗太史公之學、以爲非漢儒所及。某嘗痛與之辨。子由古史言馬遷、淺陋而不學、疏略而輕信。此二句最中馬遷之失、伯恭極惡之」（『語類』巻一百二十二 p.2951）と見られる。

（19）「過一邊」：「偏る」の意。『語類』には「致知、力行、用功不可偏。偏過一邊、則一邊受病」（『語類』巻九 p.148）と有る。

（20）「主張史記人道如何」：「主張史記人」とは呂祖謙（1137～1181）の一派を指すと思われる。『語類』には「問、東萊大事記有續春秋之意、中間多主史記。曰、公鄉里主張史記甚盛、其間有不可説處、都與他出脱得好。如貨殖傳、便説他有諷諫意之類、不知何苦要如此。世間事是還是、非還非、黑還黑、白還白、通天通地、貫古貫今、決不可易。若使孔子之言有未是處、也只還他未是、如何硬穿鑿説」（『語類』巻一百二十二 p.2952）と見られる。尚、呂東莱が『史記』を拠り所の一つとしていた点に就いては、侯外盧、邱漢生、張豈之『宋明理学史』上冊（人民出版社、1997年。P.360以下）を参照。

（21）「偏蹊曲徑」：「わき道、曲がりくねった道」。『語類』には「汪端明學亦平正、然疏。文亦平正、不好小蹊曲徑」（『語類』巻一百三十二 p.3176）と見られる。

（22）「罅縫」：本来は「隙間」の意。『語類』には「讀書、須是看着他那縫罅處、方尋得道理透徹。若不見得縫罅、無由入得。看見縫罅時、脈絡自開」（『語類』巻十 p.162）と見られ、『朱子語類訳注　巻十～十二』は「切り込み口」と積極的意味に取る（p.17）。一方、「此等事難處、須是理會教他整密無些罅縫、方可」（『語類』巻一百十一 p.2719）と見ら

れる例は、本道からはずれた「脇道」という消極的意味である。本例は後者。

（23）「臨川、何言、江默之事」：具体的発言内容に就いては未詳。「江默」に就いては「江默、字德功、崇案人、知建寧縣」（『學案』巻六十九「滄洲諸儒学案」p.2312）と見られ、注に「先生乾道年進士。嘗從朱文公遊。有易訓解、四書訓詁各六巻」と有る。『師事』（p.21）を参照。「姜姓」に就いては、嘉定四年の進士・鄭清之の『安晚堂集』「送新薑與葺芷」の注に「稗官有記、公羊穀梁並出一人之手、其姓則姜。蓋四字反切即姜字也」（巻十二）と有り、又、宋・羅璧『識遺』は「公羊穀梁、二姓自高赤作傳外、考之前史及後世、更不見再有此姓。萬見春嘗謂、公羊穀梁皆姜字切脚韻、疑其爲姜姓假託也［按文公語録已有此説］」（巻三「公羊穀梁」）と朱熹の発言を踏まえる。これらを見ると、「公」「羊」「穀」「梁」の四字と「姜」とでは反切下字が共通し、更に、公羊、穀梁の二姓は極めて珍しい姓であることから姜姓の仮託に違いないという説が行われていたことが分かる。

（24）「尚書序」：『語類』巻七十八には「書序恐不是孔安國做。漢文麤枝大葉、今書序細膩、只似六朝時文字。小序斷不是孔子做」（『語類』巻七十八 p.1984）等と多く見られる。

（25）「粗豪」：「さっぱりと豪快である」の意。『語類』には「所謂浩然之氣、只似箇粗豪之氣。他做工夫處雖細膩、然其成也却只似箇粗豪之氣、但非世俗所謂粗豪者耳」（『語類』巻五十二 p.1244）等と見られる。『近代漢語大詞典』は「粗獷豪邁」（p.314）とする。

（26）「骨肋」：「気骨、骨」の意味。『語類』には「狂狷是箇有骨肋底人、鄉原是箇無骨肋底人」（『語類』巻六十一 p.1477）等と見られる。

（27）「孔坦」：字は君平、孔愉の従子。『左氏傳』に通じていたとされる。『晋書』巻七十八に伝有り。

（28）「宛順」：「素直」の意。『管子』「五行第四十一」の「而農夫脩其功力極。然則天爲粤宛」の唐・房玄齡注に「粤、

厚也。宛、順也。天爲厚順、不逆時氣也」（黎翔鳳撰　新編諸子集成『管子校注』。中華書局、2004年。中冊p.874）と見られる。

(29)「孔叢子」：『語類』は「孔叢子鄙陋之甚、理既無足取、而詞亦不足觀。有一處載其君曰必然云云、是何言語」（『語類』巻一百三十七 p.3252）と述べる。

(30)「他却説道自好、陳涉不能從之」：『史記』巻八十九「張耳陳餘列傳」では、張耳と陳餘の諫言を聞かず秦の章邯に敗れたとされているが、『孔叢子』「答問第十九」では博士太子・子魚の諫言に耳を傾けなかったとされている。

(31)「合殺」：「しまつがつく」の意。『語類』には「凡日用之間、一禮一樂、皆是禮樂。只管文勝去、如何合殺」（『語類』巻三十九 p.1009）と多数見られる。『近代漢語大詞典』は「得當、恰到好處」（p736）とする。『田中』は「合殺」を「しまつする」（p.20）とし、「沒合殺」で「始末がつかぬ」（p.65）とする。

(32)「呂氏解」：呂祖謙には、『春秋左氏傳説』、『春秋左氏傳續説』、『東萊左氏博義』、『大事記』等の著述が有る。

(33)「説得似」：「説得似」の用法は、『語類』では「若做一章説、就横渠説得似好」（『語類』巻三十五、p.911）の様に「似」の後ろに補語を伴う用例がほとんどである。「説き得て好きが似し」と訓ずるものであろう。但し、この事例は「説得似」で言い切りとなっており、「説き得て似たり」と訓読し、「それらしく説く」の意と思われる。大慧宗杲の書簡「答汪状元　第一書」に、「只怕説得似、形容得似、卻不見、卻不悟者」と見られ、荒木見悟『禅の語録17　大慧書』（筑摩書房、1969年）は「ただまことしやかに説き、まことしやかに表現して、かえって（真実を）見もせず悟りもしない者が心配です」（p.145）と訳出しておられる。

(34)「生意」：「私情を挟む、私見を入れる」の意。『語類』には「只就本子上漢、看來看去、久之浹洽、自應有得。公便要去上面生意、只討頭不見」（『語類』巻十四 p.254）と見られる。

(35)「聖人雖有意、今亦不可知」：『語類』には「人道春秋難曉、據某理會來、無難曉處。只是據他有這箇事在、據他載

得恁地。但是看今年有甚麽事、明年有甚麽事、禮樂征伐不知是自天子出。自諸侯出。自大夫出。只是恁地。而今却要去一字半字上理會褒貶、却要去求聖人之意、你如何知得他肚裏事」（『語類』巻八十三 p.2144）、「春秋只是直載當時之事、要見當時治亂興衰、非是於一字上定褒貶」（『語類』巻八十三 p.2144）と、『春秋』は事実の記載として読むべきであり、今は窺い知ることの出来ない「聖人」の「褒貶」の意を経文の一字一字に見出そうとする読書の在り方に対する批判が見られる。

（36）「左史倚相之後」：『語類』には「先生云、楚左史倚相世爲史官、恐其後也」（『語類』巻一百三十二 p.3175）とも見られる。「左史」に就いては『春秋左氏傳』に「王出、復語。左史倚相趨過、王曰、是良史也、子善視之。是能三墳、五典、八索、九丘。［杜預注…倚相、楚史名。］」（『春秋左氏傳』「昭公十二年」。『十三經注疏分段標點』『春秋左氏傳』p.2066。新文豊出版公司、中華民国90年）と有る。